

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

The Nightmare Hunter MANARU
ナイトメアハンター 愛瑠
夢魔狩りの乙女

小説 千夜 詠

挿絵 妃田マリ

第一章	淫夢を狩る者	006
第二章	甘美なる隷嬢の世界にて	028
第三章	淫誘の白い指	059
第四章	夢幻痴獄	098
第五章	虐楽の館	152
第六章	復讐の墮天使	232
エピローグ		251

登場人物紹介

Characters



やまかまなる
夜坂愛瑠

昼間はメイドとしてお屋敷で働き、夜はナイトメアハンターとなり人々の夢の中に現れる夢魔を狩っている少女。基本ドジっ子だが、夢魔狩りに変身すると冷酷な一面も見せる。

てんじょうりりこ
天条琉璃子

女子大に通う気品ある本物のお嬢様。気は強い方だが、他人を気遣うことが出来る優しさを持つ。行く宛のなかった愛瑠を見つけ、メイドとして引き取った。

てんじょうひろかず
天条弘和

琉璃子の父。大学教授で温厚な紳士。それほど長くはない口髭、顎鬚を蓄えている。

さや
紗耶

姉御肌の先輩メイド。30歳前後の人妻で、旦那の不満をよく口にしてている。

ひろみ
浩美

愛瑠と同じ住み込みメイド。年上ながら少し子供っぽいところがある。

みか
美香

愛瑠・浩美と同じ住み込みメイド。眼鏡をかけ、肩までの黒髪が特徴。

おちあい
落合

屋敷で働く50代のシェフ。少し太めで、恐妻家の為よく屋敷に泊り込む。

いばた
井端

屋敷で働く30代後半の庭師。無口だが、自然を愛するいい人。通い勤め。

あらか
荒木

屋敷で働く30代の運転手。急な用事に備えて住み込みで働いている。

自然に口が開いてきてしまう。プックリと柔らかかそうな唇の合間から、唾液に塗れた赤い舌が覗きだした。顔が熱い。

(くっ、ううう、顔を崩しては駄目。はう……思う壺じゃない)

開き始めた唇を閉ざし、無理してでもきつく敵を睨みつける。その間に顔から発した熱が身体全体に広がり始めると、巨乳の上をなぞる軟体の感触から悪寒が薄らいでいく。弄んでくる触手状の圧迫に柔らかな乳張りが、ぷりゅんと縦に揺らされると、再び身を縮こませるような快刺激に包まれた。滑り這う刺激が緩やかに乳性感を湧き起こさせ、上塗りしているのだ。ゴスロリの下で汗が滲み始め、素肌を濡れ蒸らしていく。

再び出掛かった甘い吐息を押し込んで、無表情を形作ろうとする。だが愛瑠の体内の反応は、ビスチェ部の内側にぶっくりとしこり表れ始めていた。

「おやおや、強がりですか？　そういうのも、可愛いものですよ」

夢魔王の名代とまで自称したこの変態漢はこれまでいっただれほどの女性を毒牙にかけてきたことか。百戦錬磨の陵辱魔にかかつては強気の処女反応など一目瞭然なのだろう。

(んう……っ、くう、な、なによお、ニヤつき笑って……っ！)

自分の身体と声の震えに気付いていないのは愛瑠だけだった。

「だ、誰が強がりなんて……うっ……」

そのきつく否定する反応が逆効果なのだと気付いて愛瑠は口を閉ざした。

「おやおや、ナイトメアハンターともあろう者がこれほど感じやすい身体とは……。クク

……貴女は本当に辱めがいのあるお方だ。ではもう少し眼で楽しませていただきましょうかね」

愛瑠はチラリと瑠璃子の方に視線を向けた。相変わらずの猥褻な乱れた姿を曝け出し、茨の拘束の中で男達の手と侮蔑の刺激に妖艶な恍惚の表情を浮かべている。

(瑠璃子お嬢様……。負けない。あの方を助けるのよ！)

乳房の前の編み上げ部分に触手の先端が強引に捻じ込まれる。柔らかな乳肉の合間に吸い込まれ、そのまま温かくしっとりとした包容感に触手は喜びを表すように細かな振動を見せた。

「んっ……ううっ、ううん……」

ヌチャヌチャと粘りつくような感触が豊満の乳房の谷内側で広がっていく。首筋から流れ伝った処女の新鮮な牝気をたっぷりと含んだ汗と混じり、クチャクチャといやらしく摩擦する音が聞こえ始めた。

「ほらほら、お前ばかり楽しんでないで、もっと揺らしなさい」

インクスの欲望にギラついた視線が乳房に集中しているのがはっきりとわかる。芯から熱がじわりと広がり始め、更に脇の下と股内側に発汗を覚えた。

私……こんな奴の、恥ずかしい対象にされてるっ！

ゴスロリ服で寄せ圧迫されている巨乳の合間で触手が波打つように蠢いた。その振動に合わせてユサユサと揺らされ、同時に熱が波紋のように広がってしまう。

「ふう……んう、こ、このお……っ！」

怒りと羞恥が一斉に湧いて、つい言葉が漏れ出ていく。乳房の合間で動く触手と共に股間の触手も動き回り、彼が視姦していることをはつきりと感じさせ、陵辱感を煽り立ててくるのだ。戦いの最中ではまったく意識していなかった乳房の揺れと、そしてビスチェの内側で何度も擦られる乳首からピクンと与えられる快刺激に屈辱の喘ぎを漏らしそうになっってしまう。

「まだまだ物足りませんね。そのいやらしく膨れ上がったオッパイの全容を把握したいものです」

巨乳揺らしを中断し、触手は胸前の編み紐に絡みつく。力強く引かれていた。

「うあ、んあああつ、……っくうっ」

しっとりした桜色の唇が震えていた。無駄だとわかっただけでも叫びたい衝動に駆られる。「どうしました？ 言いたいことがあるればはつきりと仰って下さい」

愛瑠は唇を噛み締めた。こいつは自分がみつともなく哀願する様子が見たいのだ。

（こ、こんな……ふあ……奴に……何も……っく……言ったりするもんですか！）

その視界に触手が二本、その先端が襟元から柔肌を滑り内側に入り込む。全身が硬直した。息が詰まる思いがして臉が痙攣していく。揺らぎだした視界に非情な陵辱魔の姿が入った。そいつがニカーと笑った次の瞬間、

（いやあッあ……胸が、や、破れちゃうううっ！）

巨乳を窮屈そうに打ち寄せていた紐から解放され、ボンと一段膨れ上がったように揺れ動く。滲んでいた珠の汗が弾けたように迸っていった。ねっとりとした触手汁が巨乳全体を包むように広がって、いやらしい生温さが纏わりついた。

「うぐうう……」

身体中の至る部分に余分な力が入ったようで、拘束されているだけなのに体力を消耗していた。ハあ、ハあ、ハあ……。項垂れながら、乱れだした呼吸を整えようと何度か唾を飲み込んだ。乱れた金髪が顔横に垂れ、汗と纏わりついたままの精液に似た滑りで、毛先が頬に付いてくる。脇の下から滲んだ汗は珠になって乳房の下へと伝い流れていった。

乳肌の半分までは露出し、桃色の乳輪の円端が微かに外気に晒されている。

「ほほう……、これはまた見事に実ったものですね。ただいささかカップのサイズが合っていないのでは？」

露出の広がった部分から、蒸された艶肌の芳香が漂ってくる。巨乳は無理に押さえ込まれているようで、カップの縁が柔肌の弾力球に微かに減り込んでいた。そこから乳肉がほんのりと盛り上がり形を歪ませている。

熱に潤み始めた瞳で再び琉璃子の様子を窺う。男達のいきり立った肉棒が柔らかな尻丘と健康的に薄く脂肪のついた太股に押し付けられ、三本の指先が股間の肉裂の中心を蠢いている。そこからダラダラと蜜液が閉め忘れた水道水のように漏れ続け、股内から足先へと伝っていた。何度も精液を放出されたようで、たわわな乳房から下が白濁で汚されてい

た。夢の中の精神体とはいえ生々しく、限界まで開かれた剥き出しの股間の中心から蜜に濡れた粘膜の香がここまで届いてきそうだった。

愛瑠は一度深呼吸をした。

（お。落ち着いて、愛瑠。んふぁ……こいつが私に……はぁ……興味を示している間は、お嬢様へ……の被害は……あう……最小限で食い止めることができるじゃない）

立ち昇るようにならぬ触手がまた愛瑠の滑らかな乳肌に纏わり始める。生暖かいヌルツとしたベトつく感触が、自分は汚されているのだと、否応なしに意識させられた。汚辱に悶え身を捻らせることさえ許されない。触手から発散されるムンとした動物的な臭いが頭をクラクラさせ、膝が震えてしまう。乳下の谷間から入り込み、房を巻き込むように弄ばれると、嫌悪感と同時に大きな乳肉に火照りが溜まり込みだした。

「うつくう、くぁあ……っ、はぁあ……」

低く呻いて耐え忍ぶ。数本が熟した果実を思わせる乳球の頂をつつきだすと、決意を嘲るようにカップ内でピクンピクンと突起を始めてしまった。

（やだ……。気持ち悪いのに……どうして……）

乳首全体がピリピリ違和感を覚え、切ない性感がジリジリと内に籠り始める。乳首の突き伸びてまた擦られ、悦感がじんわりと身体の芯に伝わりだした。

「きゃふッ……」

膝小僧の震えが目に見えてわかるようになった。宿敵である夢魔の前で醜態を曝け出し、

屈辱感が赤茶色の瞳に涙を滲ませた。

「こ、こいつ……いいかげんに……」

薄ら笑いを浮かべるインクスにギリギリと憎悪を湧き立たせたのも一瞬だった。トロリとカップの内側に這い込んでいた粘液が乳首に塗られて生地内と擦れる度に、狂おしい搔痒感が生まれてしまう。

「ひゃあ、あつ、あつ……だめッ……!」

声が掠れていた。今すぐ両手で乳房の先端を掻き乱したい。衝動に駆られて後ろに重ねられた両腕に力が入った。後ろ手の腕を前に引こうとした瞬間、絡みついていた数本の触手もまた引き上げられる。

「はあああああ……いいっ! いいわああ……」

感じた牝のような琉璃子の声が伝い聞こえた。令嬢を拘束していた茨が白雪の柔肌にまた更に食い込んでいく。

（お、お嬢様っ! う、あつ、だ、だめっ!）

目の当りにした瞬間、互いの手を握り締めて反射を強引に抑え込む。血が滲むほどに。愛瑠は項垂れて、羞恥と悔しさに泣き崩れそうな顔を夢魔から隠そうとした。

触手の一本が煌めく金髪を束ねるように巻き付いた。背の方に仰け反らされて、顔を上げさせられる。大きな瞳に大粒の涙を滲ませ、泣き堪える悲痛な表情がそこにあった。

「あっハア、堪らなくいい顔になってきましたよ、愛瑠さん。いいです、いいですよお」

加虐的な性癖を露にして、インクスの鼻息は荒くなった。

「お、お前は……お前は、た……うあ、はあ……ただでは……滅しない」

可憐な少女には似合わぬ過激な台詞だが、既に涙声になっていて迫力は欠けていた。

「ヒヤヒヤッ……こんな状況でまだそんなことが言えますね。もっと泣き叫んだらいかがですか？ ほうら、もうすぐ乳首まで透けて見えますよ」

桃色の乳輪が粘液に濡らされて透け現れてくる。きつく押さえられたカップの内側にあつて、はつきりと興奮状態にあることを示した乳首の突起が暴露されようとしていた。

「や……あ、はや……やめ……くっう」

出掛かった言葉を唇を噛んで飲み込んだ。恥辱よりも屈辱の方が耐えがたいと思った。この時点では。

私のエッチな乳首が見られちゃう。ただの乳首じゃないの。性欲の対象にされて、辱められて感じちゃったいやらしい乳首なの。恥ずかしい部分が見られるだけじゃない。恥ずかしい私自身が見られちゃうの。

「だめ……」

引き絞られたような声。触手は更に蠢きながら巨乳をプルプル揺らし、滲んでいく触手汁を纏わせ続ける。濡れ光沢で乳肌の艶めきが増して、猥褻に強調されてしまう。

「見ないで……」

震えたか細い声。ついにカップの内側が、ヌルヌルの粘液に満たされつくした。

「見ちゃだめええええ」

頬を伝った涙が落ちて、胸元の粘液と混ざり合った。その瞬間、確かなじゅんと奥で漏れる感触に羞恥が重ねられてしまう。

「素直ですね、そこは。こんなにコリコリの乳首、なかなか見られるものではありません」
興奮しつくした夢魔の高笑いがあると、囲い込んでいた触手達が一齐に蠢き始めた。透けてしまった生地下で、円錐状に突起した乳首が圧迫されている。

(夢魔なんかいいようにされて……、うぐうう……何で、ち、乳首が……こんな……)

外気に完全に解放させようと、二本が左右それぞれ、襟首から内側に先端を潜り込ませた。身体を動かせない緊張に震え、汚辱にまた心震わされ、羞恥のガクガクが止められない。違和感の出るほど硬くしこった乳首が、こりこり触手肌に摩られて、乙女の汗香る脇の下にドロ汁が垂れていく。更に二本目、三本目とその下に積み重ねられるように潜り込んでいくと、その度に胸元の露出面が広がっていった。

「さあ、そのでかくて猥褻なオッパイの全容を私に見せなさいい！」

透明になった黒衣の縁が頂点に引っかかる。敏感な性感集中部が揺らされながら擦られてしまい、これまでよりも本格的な快感が脳髓に打ち寄せてきた。もはや平静を装うことなどすっかり忘れてしまっている。

(くはああ、だめ、こ、これ以上はああっ！)

快楽の頂点に導かれる時のような顰めた表情を見せ、震えながら開き始めた愛らしい唇

から甘ったるい吐息が漏れ出た。

「そ、そんな……のっ！ はうっ！ んああ……っ！ だ、ダメエっ！」

触手が汗とドロ汁に塗れた乳下に回り持ち上がるように根元に巻き付くと、引つかかった乳首円柱が左右に分かれるようにひしゃげた。ひゃうッ、とその刺激に呻いた瞬間、ボンと爆発音が聞こえる勢いで、弾力巨乳が飛び出した。迫力の質量たっぷりながら、張りと弾力を保って垂れ下がることなく、先端がやや上向いた奇跡の卑猥乳。

(見ないでえっ、いやっ、ダメエエエっ!!)

おおっ、という男の興奮による歓声が聞こえてきて、愛溜の羞恥をまた煽り立てる。悔しくて堪らない。キッと涙ぐんだ瞳で睨むものの、頬は桜色に染まっついて、幼い子供が怒った時ほどの迫力しかない。体格に不釣り合いな巨乳は、触手を巻き込んだまま、まだブルンと揺れ動いていた。

機会を窺っていた残りの触手共が一斉に群がりだす。それぞれが独立した生き物のようで、好き勝手に乳房を弄び始めた。

「そ、そんなに、うっ、か、からんじゃダメエっ！」

グルグルと肉のドームに何本もの触手が巻き付いていく。乳房の中腹が締め付けられ、達磨だるまのような形に歪められる。二本が編むように重なりながら突き伸びた乳首を上下に挟み込み、流れるように擦り付けていく。胸全体が蹂躪され、濡らされきった乳房は光沢を放ち、円錐突起した乳首の先端からトローリと猥褻ローションが垂れ落ちていった。苦痛



の中に潜む甘美な信号で胎内に火照りが溜まりだし、じとじとと下腹部の湿度が増していく。

「ふくろう……こ、こんなこと、や……ハあ、うゆうつ……オッパイが……」

熱ばんで潤む瞳では、瞼が自然と落ちてきて、目尻はゆっくりと下がっていく。微熱が全身に広がって痺れ始めたと同時にピタリと触手群の動きが止まった。

「くハあ……ハあ、ふあああ……よ、よくも……くろう」

眉間をきつく寄せながらガクッと一旦頭を垂れた。病に侵された時のような乱れた呼吸と締め付けるような汚辱感をなんとかしようと、大きく何度も息を吸う。だが一度発生した微熱は一向に身体から抜けていかず、秘唇が狂おしさにねちよりと淫靡な水漏れを感じていた。無残に腐淫水に汚された乳房からギュッと眼を瞑って、愛瑠はサツと顔を背けた。

「さあて、こちらももう堪らないでしょう」

脚部に絡みついた触手達が、より左右に開かせようと太股の肉付きに食い込んでくる。

「なっ……なに!？」

蒸れ籠った薄布一枚の股間を見られまいと、愛瑠も太股に力を込めた。

「抵抗する力も茨に伝わりますよ、いいのですか？」

ビクッとそこで身体を硬直させた。ああ……お、お嬢様あ……。

加虐的な劣情の入った夢魔紳士の言葉に、辺りが滲み見えるほど涙いっぱい瞳を潤ませる。全身の震えはどうあっても制御不能で、荒い息遣いで乱れた呼吸がまた巨乳を揺ら

していた。愛瑠は力を抜いていくしかない。

インクスの立ち位置から白い一角が見え始める。局部を凝視してくる彼の口元がゆつくと縦開き、猥褻な悪戯電話に似た、興奮した息遣いがそれを教えていた。

見られちゃう。見られちゃうよお。私の一番恥ずかしくて、汚くて、いやらしい部分があ！

「こ、こんなことくらいで……くううっ……こんな……んはああ……こんなこと……はああ……くらいでえっ！」

瞳に溜まった水滴が揺れ、言い聞かせるように咬く美声も泣き震えている。よりきつく、より恥ずかしい格好にさせようと、股内の腱が痛むほど大開脚させられてしまう。牡の興奮露にインクスが涎を滴らせながらゆつくりと近付いてきた。それが僅かに視界に入ると、怖気て泣き出しそうな顔が引き攣って、気配がピリピリとショーツの内奥を痺れさせると、

「み、見ないでえ……はあ……そこ……あふううっ、だけは、見ちゃだめえええッ——」

汗と濃厚な牝の甘酸臭を大量に吸い込んだ柔らかな綿布は、肉裂をほんのりと浮き上がらせるほどピタリと張り付いて、薄い恥毛と微かな隆起を見せる恥丘の形状をはっきりと現していた。

夢魔紳士は満足そうに微笑んで愛瑠の鼠蹊部そけいに顔を近付けた。

「ぐふふふ……オッパイもいいですが、この艶かしい腰つき、いやらしく肉付いたお尻に、むっちりしながらも引き締まった太股、そして卑猥なラインで魅了する股間。全身これほ

ど淫美な肉体は私も初めてです。堪りませんなあ」

気持ちの張りが保てなくなると共に、愛溜の髪から金の輝きが抜けていき、色が栗色に戻ってしまいました。

(こ、このままじゃ、くっう、ダメっ！)

熱湿地帯の股間に、夢魔紳士の鼻先の気配を感じた。ハッと気付いたと同時に、全身が震えてしまう。

「あっ……や……見るなあ……見るな……っつてば……」

赤茶色の大きな瞳から涙がポロッと零れ落ちた。

クンクンと鼻を鳴らす音が聞こえる。

(いやあつ、嗅いじやダメえっ！)

「ククク……。この漂う濃厚な牝の匂いはそのせいだけではありますまい。染みが滲んできますよ」

肉体の内から火が灯り始める。顔中真っ赤に染め上げて、

「嘘っ！ そんなの、そ、そんなの……うそ……」

必死の叫びから自信のない声に変わっていた。髪の色に続いて全身から力が抜けていく。

「しかし、貴女のここ、下着の上からだというのに、とつても……臭いですよ」

ピクッと身体が反応した。フルフルと唇が震え、僅かに残った気力だけで立っていた。

(やめて、お願いいっつ、やめてえ……)

泣き声を押し殺すので精一杯になった。

「うくつ、うう……ち、違う……ふぐうう……そ、そんな……こと……」

「なるほど、どうやら自覚があるようですね。自分のオマ○コがとても『臭い』と……くくつ、これは、我が同胞達にもぜひ教えてやらねば。これから貴女は戦う度に、オマ○コの、くつさあい、女と笑われることに……」

「いやつ、いや、やめてえっ!」

聞きたくない! 駄々をこねる子供のように、ブルンブルンと何度も首を振る。

大きな乳房以上に陰部に対する愛溜のコンプレックスは大きかった。元々感じやすい体質のため、女陰はいつも湿度が高い。陰唇の割れ目の締まりが強く籠りやすいため、確かに匂いは発生しやすく溜まりやすかった。ただ本人が思っているような悪臭ではなく、男にとっては興奮を高める濃厚な牝のフレグランスであり、催淫香と言ってよかった。インクスは愛溜の過敏な反応を見て、わざと酸味の強い悪臭のように言い『臭い』の部分だけ大声を張り上げる。

バレちゃった。知られちゃった。こんな奴に、こんな奴にい!

「くふう……堪りません。鼻が曲がりそうですよ。こんな可憐な顔をしているのに、オマ○コはもの凄く『臭い』なんてね」

「いやあ、もうやめえ! 嗅ぐなあ。鼻を……近付けない……で……」

大粒の涙がとめどなく溢れ、頬を濡らしていく。加虐的な悦びに歪みきったインクスの

耳障りな笑いが聞こえてきた。

「はひゃ、ふひゃ、ひひひつ、いいですよ。では楽しませていただきますか」

夢魔紳士の大蛇のような禍禍しい陰茎が更に伸びていく。くねりながら伸びた陰茎は、その分太さこそ細くなったが、それでも一般的な人間の男性から比べれば、巨木に違いな。ぐずつて鼻を吸りだした愛瑠の唇に、その先端が押し当てられた。

「んぐうつ！ んぶつ！ んぐぐうう、んぷうつつ！」

(なに！ いやあつつ、生臭いいい)

鈴口から滲み出た、泡立つようなジェル液が、ツンと鼻につく腐臭を漂わせながら桜色の愛らしい唇を汚していく。咽せ返りそうに僅かに開かれたその瞬間、

(ひっ、お口に……入ってきちゃうう！)

少女の口内に熱い強張りが唾液を送らせながら一気に押し込められた。くねりのたうつように口腔を押し開き、先端のぬちよぬちよした牡汁が少女の唾液に混ざりだす。口いっぱい巨大な蚯蚓のような生々しさが広がって、硬口蓋と舌上が浮き上がった血管に擦られた。

(!? ……ぬちよおつとしてるう！)

精神的な気持ち悪さに咽せ、喉奥まで潜り込まれると、更に嗚咽感が増していく。ダラダラと涎を垂らして顎部が濡れていく。唇はぬめりきって淫靡な光沢色に変えられていった。

「おい、夜坂のここ、変な臭いしないか」

愛瑠の身体がびくつと一瞬硬直した。半ズボン少年が鼻先を近付けている。

「やああん、ダメッ！ 顔近付けないでッ！ か、かいじゃ……ああん、やだアアあっ」
虐められっ子の言うことを素直に聞く虐めっ子などいない。俺にも嗅がせろと言わんばかりに、ネクタイ少年も鼻を鳴らす。愛瑠は顔を背け、口を一字に固く閉じた。全身が小刻みに震えて、ギョツと閉じた瞳の目頭から涙の筋が光っている。

「うひゃあ、臭せえ！ 夜坂のここ臭いぞ」

ネクタイ少年が大声で騒いだ。辺りの大人達はただクスクス笑っている。

少年達は臭いと騒ぎながらも、顔を背けることはない。むしろもつと嗅いでやろうと我先にと鼻先を愛瑠の股間に近付け、その臭いの意味は知らずとも、その中に含まれた濃厚な牝の淫気を感じ取って、未成熟な牝の本能で興奮を高めているかのようだった。

童謡を合唱するように少年達が口を揃えて詰り始めた。

「夜坂のお股、臭い股、夜坂のお股、くっさい股……」

幼い心に口撃の鞭がピシピシと浴びせられる。小刻みに震える身体がまた硬く縮こまつていった。

「臭くなんか……」

消え入りそうな細かい声。ギリと唇を噛み締めて感情を爆発させるように叫んだ。

「臭くなんてないもんッ！」

野球帽少年は一旦意外という顔をしたが、直後にギロリと愛瑠を睨みつける。少女は肩をビクッと震わせると、そっぽ向いて、泣きだしそうな瞳のまま、ほんの少し頬を膨らませた。

「何だと！ 俺達が嘘ついているって言うのか」
半ズボン少年がそれに続いた。

「だいたい、お前、生意気だぞ。こんな所に毛なんて生やしてさ」
羞恥と悔しさに押し潰されそうな心を奮い立たせるために、愛瑠はなんとか強気な態度を示そうと頑張った。横を向いたまま、歯を食いしばる。

「こんなもん、抜いてやる！」
「へっ……？」

びっくりして視線を下腹部に向けると、少年の指先が愛瑠の恥毛へと伸びていた。

「や……やあア……何するの……ッ」

さっきまでの強気が途端に崩れ、血の気がさつと引いていくのがわかる。恥丘に触られた途端、刺激に痙攣したように肉体が反応する。

「やひゃッ、んんッ」

ゾクッとくる性感は一瞬だった。その直後、鋭い痛みが繊細な部分に走った。

プツッ……。!? !? !? !? !?

「ひいっ！」

一気に背中が逆海老に仰け反って、巨乳がブルンと跳ね上がった。
少年の指先に縮れた毛が一本巻き付いている。つい先程まで愛溜の恥丘に生えていたものだ。宣言通り、何の躊躇いもなく、半ズボン少年は処女陰毛を引き抜いていた。

「ひゃひい……。な、な、なに……。なにするのお」

少年達を見下ろして、思わず声が漏れ出していた。

「ハハ、夜坂が怒ったぞ」

からかうように言いながら、今度は野球帽少年が二本目を抜きに掛かる。

「やだ、やだあつ！ やめて、やめてよお」

声に構わぬ小さな指に、力いっぱい繊維毛が引っ張られてしまう。

「ひゃふうッ！」

その瞬間、愛溜は再び大きく仰け反った。三本が一気に抜かれていた。鋭さの後にヒリヒリとした痛みが広がってジンジンと熱い。とうとう瞳から大粒の涙が毀れ落ちた。

少女は激しく呼吸しながら項垂れた。栗色の髪は乱れて胸元の白肌に垂れている。血は決して流れてはいないがまだ痛みは続いていた。それ以上に悲しみが溢れてきて、ポロポロ涙が毀れて落ちていく。

(確かに私はドジっ子かもしれないけれど、皆の迷惑になること、したことないじゃない。仲良くしてよ。優しくしてよ)

「どうして……。どうして虐めるの？ もう、意地悪しないでよお」

三人の少年は少し驚いたように顔を見合わせた後、ゲラゲラと笑った。訳がわからない。悲痛な訴えを笑われた気がして、涙に濡れた瞳を吊り上げた。

「な、何がおかしいのよおッ」

ピタリと笑い声がやんだ。振り返った三人の瞳を見た途端、それ以上の非難を訴えようとした口の動きが止まった。

なに？ 怖いよ。邪念に満ちた禍禍しい色にくすんでいる。彼らの身体の周りから漂うのは、ゾツとするようなどす黒い妖気だった。どこかで見たことがあり、どこかで感じたことのあるもの。でも思い出せない。

「嘘つきのマゾ牝……」

ドキッと痺れて全身から汗が滲み出てくる。拘束されているのは肉体のはずなのに、心がズキズキと締め付けられてきた。恐れ慄きながら少女はゆつくりと頭を横に振る。

「違う……」

「違わないね。夜坂は虐められるのが大好きな、エッチな変態だって、先生が言ってたぜ」

「ち、違うもん……」

「オッパイ見られたり、いやらしいお股を見られたりするのも好きなんだろ」

「違うってば！」

震えが止められない。それなのに心と裏腹に肉体は期待感に溢れ、下腹部がピリピリと過敏になっている。

「こいつ、まだそんなこと言つてら。じゃあ、確かめてやる」
幼い二本の腕が伸び、その指先が無造作に微肉を捕らえた。

「きゃふっうう……、いやあぁっ、いやはぁあぁんっ！」

湿った肉厚の花弁がきつく摘まれ、そこからバチバチと快電が弾けていく。指先に圧迫される痛みと共に広がった快感の波紋が全身に浮遊感を湧かせて蕩けさせた。柔らかくしつとりとした桜色の猥褻唇の牝肉にとろり熱い蜜液に塗れた指の先端が沈み込んでいた。

「ほうら、広げてやる」

閉ざした秘裂の奥門を摘む指先に力が入る。

「ひゃっ、ひゃっ……やだ、やだぁ……もうしないでえ！」

ぐいっと乱暴に押し広げられた途端、ドロつと濃厚な淫粘液がローションのように流れ落ちていった。三人の少年の目の前で、透明な蜜汁の流動が光っている。滴らせる牝粘膜から甘い淫湿の香りが漂って、目の前の半ズボンの股間がみるみる膨らんでいく様子が愛瑠にはわかった。

「な、なんか、ネチヨネチヨしたオシッコが出たぞ」

「知らねえのか？ 女はな、エッチな気分になるとここがグシヨグシヨになるんだぞ。：

…って先生が言つてた」

「じゃあ、夜坂はやっぱりエッチなんだ。虐められて、恥ずかしい格好を見られて、エッチになつたんだ。おい、やっぱり喜んでんじゃねえかよ。この変態夜坂！」

瞳に涙を溜め込んだ泣き顔が三人の少年に一斉に見上げられる。彼らの表情に怒りはなく、普段はすました美少女の恥ずかしい真実を知って、喜び興奮に歪んでいるように思えた。少年には似つかわしくもない下卑た笑い声が耳に届く。

「ヒック……うう……。ち、違うもん……」

「嘘つけ！ じゃあ、これは何なんだよ！」

野球帽少年の手にはぬらぬらと光る淫蜜が纏わりついている。欲情の証明を見せ付けられ、愛瑠は思わず視線を落とした。弁明の言葉など思いつくはずもない。

（エッチなの、見られちゃってる……は、はずか、しいっ！）

いきなり野球帽少年が立ち上がった。

「認めないって言うなら、こうしてやる」

淫蜜に塗れた手の平を揺れ動く巨乳に叩きつけた。パシッ！

「はうっ……」

愛瑠の眉が一瞬吊り上がり眉間に皺が寄る。乳房がゴム鞠のように蜜液を弾いて飛沫を立てた。反射的に仰け反り、栗色の髪が乱れ広がる。刹那の激痛の後、柔肌に赤い手形がついて、そこからジーンと熱を感じていく。

（へ、変な……感じ……。気持ち……。いいの……？）

確かな心地よさ。戸惑いを感じながら、愛瑠は悲しそうに唸った。

野球帽の少年は少女を責めた直後、思いもよらぬ柔らかさに驚きを隠せず、押し返して

くる張りの感触に興奮を高めていた。

「夜坂のオッパイ……すげえ……」

悪戯な少年の顔に好色な下衆のものが混ざった笑顔で、野球帽少年は愛瑠の蕩けるような下腹部粘膜を無造作に弄った。指先と濡れ陰唇の擦れるくちゃくちゃという猥褻音が響いて、鼓膜から性感を伝えてくる。過敏で繊細な部分を乱暴に扱われ、その指使いはとても上手とは言えないが、恥辱と被虐感に愛瑠は喘いだ。

「きゃふっ……あうう……触っちゃ……だ……あひゃっ、ん……だめ……」

たつぷりと愛瑠の蜜液を溜め込んだ手の平が、再びプルンと揺れ動く乳球に張り付いた。

「ひゃっ！」

今度はずぐには離さない。柔らかな乳肌に五本の指先が吸い付くように張り付いて、指間が肉の盛り上がりを見せながら沈み込む。淫香漂う粘液を乳房全体に塗り込んでいくその手の平の動きは、明らかに感触を愉悅するためのものだった。

「あはは……夜坂のオッパイ、エッチなお汁でベトベトだあ」

自分の身体から滲み出たものとはいえ、不浄な部分から溢れたそれが、愛瑠にはとても綺麗なものとは思えない。ヌルヌルとした蜜液が柔らかな乳肌を垂れ流れていくと、汚物を塗り込められたような気分になって頭がクラクラしてしまう。

「やああ……汚いよお……やめ……やめえ……」

自分の中に潜む淫猥を示す牝汁に、密かに自慢に思っていた美しい肌理細やかな柔肌を

汚されていく。汚辱に苛まれながらも、肉体からは虐められている悦びに被虐の炎が燃え上がろうとしていた。

「女のオッパイ……夜坂のでっかいオッパイ……気持ちいい……」

同時に感じやすい乳房が揉みしだかれる快感には嘘をつくことはできない。がさつで乱暴に力を込めるだけの愛撫とは到底言えない驚掴みだったが、愛瑠には乳房を弄ばれているという事実だけで、身体中がビュクンと振られて感じやすくなってしまう。断続的に筋肉は緩みと硬直を繰り返し、次第に弄ばれる現実を受け入れていった。

（ふぁ……なんで……こんなこと……されて……）

小さな男の子の指先は豊乳の肉間に隠されるように埋もれていく。弾力の押し返しが暖かく包み、むにゅむにゅ揉みしだかれるごとに歪み、形が自在に変えられてしまう。食い込む指感と反発する乳肉の揺れ動きが思考を混乱させて、乳房に塗り込められた蜜液に内から滲んだ汗が混ざっていった。

「はううん……ハああ……やめ……あはッ……やめて……」

搾り出す声にも甘ったるさが混ざりだし、表情は逆上せ桜色に上気する。

その最中、半ズボンの少年は愛瑠の背後に移った。反応揺れる少女の球形のお尻に顔を近付け、下部割れ目に両手を伸ばす。汗ばんだ手の平がしつとりと柔らかい尻肉に張り付いた。

「ひゃはん！」

乳房に負けず劣らず感じやすい尻肌を半ズボン少年の手の平が撫で回す。極上のスイー
ーツのようにプルンと揺れながら、幼い指先に弄ばれた。

「ここも、柔らかくて気持ちいいぞ。アハハ、お尻の穴が見える」

また一つ、人には決して見せない不浄部を凝視された。

（お尻の穴っ、汚いところ、いやっ、いやああああっ！ 見ちゃあ、だめえっ!!）

視線を敏感に感じ取って、尻穴の皺がヒクヒクと蠢きだす。鼻先が近付く痺れに似た気
配にむず痒さが湧き起こった。

「や、やつ、だめえ！ きゃはあ……き、きた……ひやハあ……汚いよお……」

まるで宝物を見つけたように半ズボン少年は菊蕾をうっとり凝視している。

「うるさいぞ！ へへ、今度は舐めてやる」

汚物の排泄口にヌルリと湿った感触が走った。

「ひゃ、ひゃっ、お、お尻が……」

尻肉の合間に少年の温かな頬が当たる。蠢く舌先がのたうちながら、アナル皺を振動さ
せて、ほのかなむず痒さに心地よい性感が広がった。くすんだ桃色の粘膜皺に唾液が塗り
込まれ、ペチヨペチヨと湿った音を立てていく。

「そんな、きた、汚いっ、ダメえ、舐め、んう……舌入れちゃダメええっ！」

愛瑠が胸とお尻を同時に責められている間に、ネクタイの少年は吊られる彼女の下に潜
り込んでいた。濡れた肉花卉の合間からトロトロと滴り落ちてくる愛蜜を顔で受け止めな

から淫猥な光景を堪能している。彼は少女の泣き叫ぶような乱れを期待して、いよいよ動いた。

興奮した男子の鼻息が敏感な肉芽に当たる。「きゃふっ」と愛らしくも淫靡に声を漏らした少女のクリトリスはニユンと伸びて、感じてはピクピク動いた。指先の空気を過敏に感じて、恥ずかしい緊張感に肉芯が痺れてくる。考える余裕もないまま、パールピンクのそれは少年の三本の指に囲まれた。

「うひゅっ!? ひゃひゃッ……やああん……」

肉芽が自ら求めるようにピタピタと指腹に当たってしまふ。垂れ流される淫蜜をピチャピチャ跳ね飛ばしながら、肉芽が指先を叩く度に脳奥に快感の衝撃がズンズンとぶち込められた。

「ゆ、指……ふひゃ……そんなに、コリコリ、しないでっ」

「やだよ。こうしてやる！」

三つの指がとうとう過敏な肉芽を捕えると、思いもしない快感が身体中を駆け巡る。

「きゃふっうううッ……ひゃあッ、きゃひゃあああああ——」

愛瑠の全身が激しく痙攣を起こした。一瞬の痛みが被虐の気分を一気に高め、苛烈な刺激が全身の柔肌の表層で快感の火花を散らす。

（ふあふあ……な、なに……痛いのが……熱くてじわじわ気持ちいいのがくるう……）

溜め込んだ小水をようやく放出した時のような惚けた表情に刹那なって、心地よい身の

艶やかな栗色の髪を振り乱して愛瑠は暴れる。肉体の制御がまったく利かない。拘束された状態で強引に注ぎ込まれる性虐の刺激から逃れることはできなかった。

「ひゃあはああつ！……だめえええ、らめらよおおつ！はぎゅううううつ」

膣内に淫汁が大量生産されどんだん溜まり込んでいく。意識しないうちに自然と膣内壁を締め付け、蜜口がきつく閉じ込んだ。子宮から膣道にかけて激しく振動して快楽の波に意識が飲み込まれていく。

「ひゃふうううッ！な、なんか……きやうッ……ふああ……でちゃう……でちゃ……」

円錐状に突起した桜色の乳首に歯を立てられた。菊門を舌先が強引に侵入して内粘膜を刺激する。少女の感度がどんだん高まって、全身の受ける激快楽が肉内に籠ってすぐにも爆発してしまいそうだ。

（お、おかしいよ……奥から……んああ……なんかきちゃうつ！）

仰け反って天を仰ぎ仰け反る愛瑠の瞳から涙が伝い落ちていく。小等部四年生の心に切なく込み上げてくる頂への募りきつた欲求が、全身の孔を弛緩させてくる。

（あははああん、だめえええつ！どうにかなつちゃうううつつ！）

唇が震え、快楽に全身が痺れきつた。肉体の動きに自制が利かず、腰部がフルンフルンと波打ってしまう。

熱い熱い熱いのおおつ！

伸びきったクリトリスが指先で引き千切るように歪まされたその時、

「なひゃっ!! いたっあつつ、くきやああああああつ!!」

ズビュッピュピュバシャッ! プシャシャシャッ!

大量の淫汁が飛沫を上げて滝のように勢いよく噴出した。

ネクタイ少年の口元に流れ込み、彼の衣服を濡らしていく。更にそこから漏れたものが地に滴り落ちて、大きな淫液溜まりができていく。

(はあ、な、なんだか……ふああ……き、気持ちいのお、溶けちゃうよおつ)

愛瑠は何度も身を激しく痙攣させ、絶頂の快感に思考が白く染まっていった。

少年達の身体が離れると、ビクンビクンと反応する肉体も終息を見せ始めた。ただ愛瑠の意識は高揚とした熱に包まれ、快楽の余韻と共にまた深い眠りへと落ちていった。

目覚めた愛瑠の赤茶色の瞳に澄み渡った青空が映る。小さな逸れ雲が一つ流れて、初夏を思わせる風が流れていた。

(あれ、私……どうしたんだろ? ここ、どこなの?)

心地よい気だるさの中、ぼーっと考える。あやふやなイメージが淡い色合いで浮かんでは消えていく。心の中に様々な夜坂愛瑠が現れたが、結局主人格に落ち着いたのは小等部四年生の彼女だ。

重力を背中に感じ、硬いものに背筋を押される痛みがあった。身動きするつもりが、身体は言うことを聞いてくれない。



瑠と瑠璃子は首輪に引かれてリビングに戻っていた。ここまで苦痛と悦びを繰り返し、乱れたゴスロリ姿から、虚脱感は拭えない。どこかであざけ笑っているのである。うら夢魔のことを考えると、悔しさと悲しさで心が締め付けられるが、肉内に籠り続ける被虐火が疲れた身体をその場から動かそうとはしなかった。

牝奴隷の二人以外はどっかりとソファーに腰掛けた。ゴクゴクと冷えたビールを呷った弘和に、隣に座った井端が耳打ちをする。

「ふむ、そうかい……。皆、聞いてくれ。先程の噴出競技の結果が出たよ。瑠璃子、こっちに来なさい」

四つん這いのまま父親の傍へと寄っていった娘は、命ぜられるまま拭われたばかりのお尻を弘和の方に向け、膝を浮かせた姿勢で待った。恥ずかしそうに頬を染めながらもその瞳は期待感に満ちていて、腰を掴まれると共に甘い吐息を漏らす。剥き出しの肉棒で秘裂を弄られ猥褻な涎を垂らす蜜口を探り当てられると、そのままズブズブと突き込まれた。

「んっ、ふあ、あはあ……。お父様あ……。あん……」

愛瑠は人目をばからぬ近親相姦をまともに見ることができず、さつと顔を背けた。

「ふふふ、我が娘ながら、なかなかいいものを持っている。そう、お前が勝者だ。そしてこれでご褒美のチンポだよ。ふん、ふんっ……。後で、他の男達のチンポも与えてもらおう」といい

瑠璃子は頬を赤らめながらも父親の肉棒から与えられる膣性感に素直に感じて、自らも

腰を揺り動かしている。ズンズンとした突き上げに、たわわな尻肉が大きく震えた。

「はああん……いいわ、とつてもいい……。あはああ、お父様の御チンポ……ふああ……
とつても気持ちいい……」

肉棒と膣粘膜の擦れるクチャクチャという淫靡音がリビングに響く。

「さて、敗者には、罰を与えないとね」

眼鏡越しの怪しい弘和の眼光が愛瑠を捉えた。瞬間怯えが走るが、同時に被虐の期待が秘芯を熱くさせてしまう。ぬちゆりと漏れ出た淫蜜がパニエの裾を汚していた。

(あ、あの時みたいに……ん、つふあ、変な感じ、どうして……あふ……なの……?)

疼きだす牝肉が陵辱を期待してゾクゾクと煮え始めるのを感じながら、一瞬心を支配しかけた淫らな欲望を振り払う。

(私……何を考えて……)

娘を犯している旦那様の視線が愛瑠の斜め後ろに移動する。少女はハッと気配を感じて振り返った。

浩美が二匹の大型犬を連れてきていた。シェパードのアレックスとバロンだ。しかし二匹ともどこか様子がおかしい。いつもは大人しく落ち着いた名犬なのだが、今日に限ってはどこか興奮状態にあるようで、その青い瞳は虚ろであり、まるで――。

(ま、まさか、ワンちゃん達まで!?)

その証拠を彼らの下半身に愛瑠は見た。

「ひいっ」

先端にいくほど太さを増した円柱型の赤々とした肉棒は硬直しきって、ピクピク跳ねながら早くも淫水を滴らせている。犬にもサイズは色々あるのだろうが、彼らのそれは人間様を凌駕する逸物だった。

浩美がさも嬉しそうな笑みを浮かべて言い放った。

「敗者のまなるんは、ワンちゃん達のオチンチンに犯されちゃいまーす」

彼女の満面の笑みに隠された変質的な虐楽に戦慄を感じて顔から血の気が引いていく。不気味にも思える薄ら笑いが辺りから聞こえ、小柄な少女の身体の周りをグルグルと回っていった。犬のペニスなんて、絶対に無理っ！ 全身を締め付けられるような心の圧迫に耐えきれず、逃げ出そうとした途端に首輪が縮まり、愛瑠は咳き込んで倒れた。

「いやああ、た、たす、助けて……」

「もう、じたばたしないの。まなちゃんは今から牝犬になるのよ」

紗耶の手が四つん這いの愛瑠の股間に伸びた。何の抵抗もなく秘裂は指先を受け入れ、その蕩けさせられる弄りに淫らな涙を流して悦びを表現してしまう。妖しげな恥辱の快感で火照った身体を甘美な指先で慰められると肉芽がピクピクと跳ねてしまった。

「ダメ……こ、これ以上は……んあ……おかしくなっちゃ、はあ、う……ふあはああ！」

「あらあら、こんなに発情してよく言うわね」

浩美も脇から巨乳を揉みしだいてきた。たおやかな刺激が穏やかに包み込む快感を運ん

で、恐怖感を呑み込んでくる。

「ひゃあはあ……アハあ……はあ、ハあ……」

重くトロンと半分閉じてきた瞳に牡犬が映る。視線は意識せず彼の股間に移動して、ピクピクと脈動する陰茎を捉えた。

(アレックス……?)

ピョンと前足だけ跳ねてアレックスは半身を愛溜の背中に乗せた。愛溜の鼻先に犬ペニスが突きつけられる。人間の肉棒とは違う生きたソーセージのような赤々とした獣の逸物。そこから感じるのは、野生の荒々しさと生々しい醜汚感だった。

「いヒっ……!」

愛らしい桜色の唇がへの字に歪む。

(あぐっう……これが……うはあ……ワンちゃんの……はあ、はあ、オチ……ンチン……)

醜悪さの塊を瞳が捉えてから全ての機能が停止したように動けなくなった。高鳴る鼓動の音だけがやけに響いて、畜生の陰茎から汚物感を感じるほど、唾液が口内に溢れて変態的な興味にそそられている自分を教えてくるのだ。

乱れきっても煌めく光を放つ金髪が浩美の小さな手に捕まえられる。強引に顔を上げさせられると、艶やかな唇の僅か数ミリの所に犬ペニスの先端が迫っていた。

「さっ、まなるん、アレックスのオチンチン舐めてあげて」

震える唇が拒絶の言葉を発しさせてはくれない。

(こ、こんなの……人間のする……あふ……ことじゃないのに……な、なんで、口が……)
最後の尊厳で試みる抵抗も、虐楽への誘惑に引き下がりが、震えながらゆっくりと唇が開かれていった。赤い舌先が伸ばされると同時に口角から唾液が漏れて口元を汚していく。呼吸が変態行為の興奮に乱れていく。ハアハアと猥褻な自分の息遣いが脳内に響いて思考の繋がりが途切れ始めた。舌先が鋭角な犬ペニスの先端に触れた瞬間、涙の筋が頬に引かれ、膣口が連続ヒクつき、ドッと愛蜜を吐き出してしまふ。股内側をツーと這い落ちていく滑る液体の感触に頬を桜色に染めながら、夢魔の高笑いが聞こえた気がした。

(うう……しよっばい……)

舌先だけの味覚が、刹那のうちに口内全体に広がった。アレックスが自ら腰を前に突き出し、肉硬直を可憐な唇の奥へと押し込んだのだ。

「ん、んぐっ！ ……んうん、むぐっ、ん……」

ズズッと喉奥にまでペニスが押し込まれたが、咽せることはなかった。天性の淫体を持った少女は本能的にディープスロートを行って、喉口で先端を締めながら舌全体を陰茎に絡めていた。ダラダラと涎を垂らしながら、自ら顔を振り動かして牡を刺激していく。

私、もしかしたら本当にマゾ牝なの？ 自然と腰が蠢いて、球状に盛り上がった白い尻肉をくねらせていた。滴り続ける愛蜜が、股内に滲んだ汗と混ざり合って床まで伝い落ちていく。

「あんなに嫌な顔してたのに、まなるん美味しそう」

「まなちゃんはド変態だもの。さあ、バロン、今度はあんたの番よ」

愛瑠の背中に肉球の感触が当たった。紗耶に促されたバロンが丁度動物の交尾のように、上半身だけを牝の背中に乗せて、バックから突き入れる姿勢をとったのだ。二匹の牡犬が顔を突き合わせ、伸ばされた長い舌から唾液が滴り、愛瑠の背を汚していく。

被虐牝の本能に動かされ、汚辱の快感に浸っていた愛瑠に新たな変態陵辱の予感が走った。戦慄わなないて全身を振り動かした。淫靡で汚らしい部分と思っても、最も汚されたくない女の子の一番大切な部分。そこに獣の生殖器が当てられた瞬間、大きな瞳が見開かれ、全身の振りは震えに変わった。

(こ、これも……ワンちゃんの……オ、オチンポっ！ ひいひいひい)

ガクガクと心が怖気を感じながらも、露ダクの牝花卉が鋭角な犬肉の先端に震わされた途端、快熱が全身に行き渡っていく。乳首がピリピリ痺れるほど過敏になって、秘部が緩み、そこからとろとろ淫蜜が溢れていく。堪らない疼きが女陰全体に湧き起こり、膣道がピリピリ顫動していった。

「さあ、入るわよ」

ギラギラとした紗耶と浩美の視線が結合部に集中した。獣交の瞬間を見詰められ、貪欲な本性を曝け出す羞恥も、興奮を上塗りさせる。

重く鋭い衝撃と共に、赤々とした獣根が蜜口を押し開き、ズププッと侵入を開始した。

「んッ！ うぐうっ、んむぐうっうううっ！」

淫蜜を迸らせ、犬ペニスが牝卑孔に飲み込まれていく。鋭く抉り込まれる感覚に、膣と子宮が悦び唸る。汚臭の塊のような獣肉を歓迎するように卑窟の濡れヒダがニユルニユルと纏わりついていった。

(ひゅいひゅいっ……き、気持ち……いいよお……っ)

ズボボッ、ズギユズボッ！ 脳髓に衝撃が叩き込まれ、全身が快感に戦慄く。

「きゃはああ、凄い凄い、まなるんのオマ○コに犬のオチンチンが本当に入ったあ！」

疼ききついていた肉壺が抉られる摩擦の快感に痺れていく。野性の本能の激烈な突き上げが膣奥へと打ち込まれる度に、ブルンブルンと柔らかな尻肉が震わされる。淫蜜に溢れた膣内壁が擦られるその間だけ搔痒感が治まり、次の瞬間にはより強い疼きに襲われる。キユルキユルと犬ペニスに吸い付き締め付けながら、膣内の肉ヒダが、もつともつとせがんで顫動していった。

「ふぎゃああああ、ワンひゃんの……オヒンヒンぐああ……」

苛烈に喉奥を突き上げるアレックスの肉棒に唇を塞がれながら、愛瑠は泣き叫んでいた。後ろからのバロンのピストンは一突きごとが大砲の衝撃で、肉花卉が震わされながら蜜液がビシヤビシヤと迸る。

じゅぽっ、ズビョッ、ジュボボボ——ッ！

物理的な刺激に肉体は発情した反応を露にし、愛瑠の色腰は快楽を貪欲に求めて波打つように上下した。

加虐的な性欲処理の奴隷となった自覚が心をも身悶えさせる。虐められるのが気持ちいい。変態と罵られ、それに準じた行為をさせられるのは堪らない快感だった。恥ずかしい姿を見られると秘芯が熱くなつてまた汁が溢れて太腿の肌を伝う。

「あはああつ、いいのつ、あはああつ……」

耳元に、男根に突かれて悦び喘ぐ瑠璃子お嬢様の声が聞こえてきた。淫乱なマゾ牝と化した令嬢は、あの夢の世界で見せたような恍惚のまま、ソファアに座った料理人の腰上に背を向けながら跨つて、熱く蕩けた女肉に巨根を銜え込んでいる。汗ばんだ姿態から汗を迸らせて、激しいグラインドを繰り返して、貪欲に快楽を貪っては、唾液滑る唇から舌突き出しながら濃厚な吐息を漏らし続けていた。

その淫靡な秘事の肉と肉の擦れから搾り出された猥臭が愛瑠の鼻腔まで届いてくると、堪らぬ牝の欲求に突き動かされてしまう。

（お嬢様あ……くああ……気持ちいいれすのおっ？ 私も……欲し……だめえつ、助けられな……はああ……諦めちゃ……ああああんあ……ん、でも気持ちいいのおおっ！）

ずぶつ、ずぶつ、と激しく膣内壁を振れ擦られる陵辱悦に、それが比喩でない本物の獣から受ける変質性に、少女の牝肉が燃え上がる。

欲しいの、欲しいの、汚されたいのおおおおっ！

ちゅぱつ、じゅるつ、じゅるじゅるううっ！

ネチヨネチヨと唾液の濡れそぼった唇で陰茎を激しく扱きたてる。その淫ら牝の口内で

は、猥褻舌が肉棒に絡みつきながらのたうち蠢いて、激しく牡を刺激していった。

金髪美少女の上半身は汚辱を求め、下半身では姦楽を貪って、ズボッ、ちゅぽっ、ズズンッ、くちよ、ぬちよズボボボ——ッ！淫猥な旋律を奏でていった。

アレックスの様子が変化した。ブルブルと全身を震わせながら、興奮しつくしてしきりに顔を上下させる。人間牝の舌技に完全に屈し、ビクビク肉棒を跳ねさせて、咆哮をあげた。

「んんっ、んぐうううっ！んんっツツツっ！」

愛瑠の口内に獣の精臭が広がって、ドクドクと淫水が溢れ注がれる。アレックスが飛びのき、ペニスが抜けた途端に、少女の口元からダラダラと白濁水が漏れ出てそのまま床に滴り落ちた。

「ぶはツツっつ！くはああっつ、ワンちゃんに、うぐううう、犯されてるウ……愛瑠のオマ○コに、うはあああ……ワンちゃんのお……オチンポおとおお……」

ようやく声を発することができるようになった愛瑠は想いの丈をぶつけるように叫んだ。今度は髪を振り乱しながら激しく腰を振って、犬ペニスから貪欲に快感を得ようとしている。再び全身は汗塗れになって、たわわに揺れ動く胸の肉果実から飛び散っていく。

（ふぁ、ひえ……ワンちゃんの……はぁ……オチンポお……くぁ、気持ちいいよおっ）

犬肉根の苛烈な挟り込みの度に、ズシリと重い快感が広がって、卑熱に喘ぐごとに理性が背徳に塗りつぶされていく。

「どうして、どうして、感じちゃうのおお……。酷いことされてるのにいい……」

「それは、お前が、変態のマゾ牝だからだよ」

愛瑠の眼前に先程まで娘を犯していた弘和が立った。

バシヤバシヤジャジャ——。

いきり立った旦那様の肉棒に奉仕の唇を近付けようとしたその時だった。男の尿水が少女の可憐な顔を汚していた。額に当たり、鼻筋を伝って口に入っていく。

「あひゃああ……旦那様の、おしっこ……」

きついアンモニア臭が脳内を痺れさせる。顔中が生暖かさに包まれたその時、抑え込んできた虐められる悦楽が爆発した。

（臭いのが……あはあ……いい……）

苦辱に眉顰めた顔が、うっとり惚けてくる。

「ははは……変態のお前には、お似合いだよ」

周囲には何時の間にか天条家の人間が集まっている。その中には四つん這いの状態で、まるで愛瑠の猥姦に合わせるように腰を振り動かす琉璃子もいた。彼女は自身の快楽を追求しながらも、その興味は未だ愛しいメイドから離れてはいない。恍惚の中に慈しむような瞳で愛瑠を見詰めている。

「ぼ、僕からも愛瑠ちゃんにプレゼントだ」

弘和の言葉に同調するように井端も愛瑠に向けて放尿する。背中に生暖かいものが降り

注ぎ、黒ゴスロリを染み汚して脇から乳房に滴っていく。犬の肉棒に突かれながら激しく揺れる巨乳から黄金水は迸り、周囲に撒き散らされた。

「ひゅひいッ……背中が……オッパイがあ……おしっこ臭いいいいいい」

続いて落合は、璃璃子女陰から肉棒を引き抜いてくねり揺れるお尻に、精液を放出する。柔らかな球体からドロドロと垂れ伝い、むっちりとした太股まで白く塗りつぶす。

「ふあっ！ くあはあ、あはあはあ、熱いいっ！ いひ、いっつっ！」

悦びに満ちた声を張り上げていた。温かくて、臭くて、感じちゃうのお！ 尿と精子に汚される度に、心の奥底に隠し通してきたマゾヒズムが剥き出しにされていく。

「きゃはは、浩美もやるう」

愛瑠の頭上を跨いだ彼女は黄金水を迸らせた。黒鳥のヘッドドレスが水圧で揺れ、少女の艶やかに煌めく髪がアンモニア水に濡らされていく。額から滝のように流れては、トロと薄目になった瞳の上の長い睫毛が跳ね動いた。

「あひゃはあ……皆にい、ふああ……汚されちゃううう……」

尿と精液の臭いで頭がクラクラしてくる。ただどうしようもなく心地よい。

（くああ、素敵……こ、こんなにも……ほああ……気持ちいい……）

淫ら牝の本能赴くままに、全身を激しくくねらせ、柔らかな巨乳を叩き合わせ、艶尻が何度も振り揺らされた。理性の籠かごが外れて、完全な牝奴隷へと墮ちていく。

「はひゃ、あハあ、ハあ……もつと……」

「そ……そこも……、あ、あ、はあぁん、そこも虐めてえええええっ！」

「変態のマゾ淫乱娘があっ！」

ギユギユッギユ——ッ!!

捻じ切られるほどに摘み上げられ、腰が悦感で持ち上がり、ふるんふるんと胸が揺れる。
「いいいいっ、いいれすううっ！」

ドクドクと膣内で蜜液が満ちてくる。同時に内壁が肉棒をキュキュッとぎゅぎゅと締め上げて、激しく顫動を開始したのがわかった。

苛烈な肉ビラの腰つきのスパンキングにヌチヨヌチヨといやらしく湿った音が混ざり込み、卑猥な肉同士の結果部分から、ブシュ、ブシューッと大量の淫蜜が噴出していく。暴れ回る肉棒で膣内の粘膜ヒダが掻き乱されて、削げ落とされていきそうな感覚が堪らない。
「壊しやれうううッ！ ワンしゃんの、はぁっ、オチンチンっ、もっど、もっど愛溜のオマ○コおおおっ、虐めてえ〜っっ!!」

膣内がギユウと収縮していく。犬ペニスをぎゅぎゅと締め付けると、秘粘膜のヒダが全体を刺激して、精を搾り取るように吸い込んでいく。

「キャウウウウウ……」

牡の本能でパロンは腰を激しく動かした。おそらく同族から得られない激快感を与えられ、ズンズンと肉棒が延びつくす。子宮を激しく突き上げながら、先端が爆発したように弾けた。



「ワオオオオオオン——」

獸の咆哮と同時に、愛瑠は大きく金髪を振り乱して激しく仰け反った。

ズズビユッ、ズビユリユビユビユッ、ドドドびゅゆゆうううッ！

白濁の灼熱が膣内にドッと注ぎ込まれた。

「くひゃあああッ……ワンちゃんのが……入って、あひゅあ……イキゅううっ……」

ドクドクドク……ッ。

ビクンと膣内でのたうち続ける肉棒に合わせて、愛瑠の背中也跳ね止まらない。舌下から湧き続ける唾液にだらしなく涎を垂らしながら愉悅に浸る。

「ふりゃ、ひゃふうう……ん、気持ち、あふう、いい……」

ジーンとまだ熱が籠って余韻の震えを示している愛瑠のお尻の上から Baron は離れない。肉棒は蕩けきった卑肉の奥でまだ蠢き、惚けた少女の熱を冷ましはしない。とろとろ淫水は漏らし続けられ、子宮が熱く沸き立ってくる。

「愛瑠、愛しているわ。今度は私が貴女のお尻の穴をイカせてあげる」

「ふあ？ は、はれ……、お、お嬢様！」

双頭のデイルドの片端をヴァギナに挿入した琉璃子が、愛犬の体位をずらさせ、四つん這いになって愛瑠にお尻を突き合わせた。

うねりくる快感にヒクつく肛孔が、黒い巨大なデイルドの逆端に責め込まれた。アナル皺がぎつく内に巻き込まれながらズボズボと入り込み、それでも待ち望んでいたかのよう

に、しつとりと暖かな腸内は無抵抗に受け入れ、硬い強張りに満たされる。

「かはおあん……お嬢様の……はう……御チンポがあ……ふあはあ……」

あさましく腰をくねらせる二匹の牝犬のお尻を井端は狂ったようにベルト鞭を浴びせ始めた。汗が飛び散り、球体状に盛り上がった白い尻肌は無数の赤い蚯蚓腫れがつけられていく。濡れ塗れきった秘裂の奥ではムクムクと再び犬ペニスが熱硬を蘇らせ、ビクンビクンと腔内で跳ね回りだした。

狂乱の宴の主人公となっている愛瑠は、全身の外と内からくる責め快楽に完全に飲み込まれていく。ピストン運動に巨乳が大きく揺れ、摘まれた乳首が何度も引つ張られる。肉芽はピクピク痙攣したように蠢き、紗耶の指腹を叩いていた。

「ひやりやああああ……いいれすう……むちゃくちゃに……あはああ……なっちゃううう……あひやああ……くるちゃ……くるひやいまふうう……」

アナル皺が何度も捲れ裏返り、また内に押し込まれるを繰り返す。その奥ではデイルドの擬似血管が苛烈に繊細な腸粘膜を何度も摩擦した。細やかな肉ヒダが震わされると、熱痺が沸き立って、蜜液のような腸内水が滲み出てくる。ぐるぐると頭の中を激しい性感が責め込んで、自分の状態が認識できない。子宮が痺れて腔内が細やかに振動すると、注ぎ込まれたばかりの獣精子が揺れて波紋を描く。犬ペニスがその腔内で暴れ、直腸が何度も貫かれると、淫汁が溢れて、プシャプシャと結合の僅かな隙間から排出されていった。

「むひやああああ、くふ……あ、はああ、イッちゃあああ……」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>